

第1回死生懇話会 会議録

日時：2021年3月6日（土）
14時30分～16時45分
（Web開催）

滋賀県では、誰もが避けられない「死」について真正面から考えることで、限りある「生」をより一層充実させる施策につなげる契機とするために、様々なお立場やご専門の方からなる「死生懇話会」を2020年12月2日に設置しました。

この懇話会は、どう生きるのが良いかといった価値観を押し付けるものでは決してなく、「死」や「生」の捉え方等についての様々な考え方や取組の情報を発信していくことで、それに触れた方それぞれのアンテナにひっかかる“何か”を見つけていただき、より豊かに生きることのヒントを見つけていただけるものにしたいという思いで開催するものです。

そして、今後、多死社会を迎える中で、行政の役割や行政へのニーズもこれまでとは違って来るのではないかと考え、「死」を捉えた「生」のあり方について、皆さんと議論を深め、様々な視点からのご意見や情報をいただくことで、多死社会において行政ができること、人生100年時代に行政に求められることが何かを探っていきたいと考えています。

2021年3月6日（土）には、「第1回死生懇話会」を開催し、「死」というものを暮らしや地域の中で遠ざけず、直視して、だからこそ、生きていることをより大切にし、一緒に生きていることに意味を持たせていく、そうしたことについて議論を行いました。この冊子はその「第1回死生懇話会」の内容を会議録としてまとめたものです。

【第1回死生懇話会 出演者】

- ・打本 弘祐さん
龍谷大学農学部 植物生命科学科 准教授
- ・越智 眞一さん
一般社団法人 滋賀県医師会 会長
- ・楠神 渉さん
滋賀県介護支援専門員連絡協議会 副会長
- ・藤井 美和さん
関西学院大学人間福祉学部人間科学科 教授
死生学研究者
- ・ミウラ ユウさん
NPO 法人好きと生きる 理事
一般社団法人子どもエンターテインメント
代表理事
- ・青柳 光哉さん
滋賀県立大学人間看護学部 3年
- ・三日月 大造
滋賀県知事
- ・上田 洋平さん (ファシリテーター)
滋賀県立大学地域共生センター講師

○事務局

それではお時間になりましたので、第1回死生懇話会を始めさせていただきます。この「死生懇話会」は、だれもが避けられない死について行政としても真正面から考えることで、限りある生をより一層充実させる施策につなげるため、昨年12月2日に設置をいたしました。まずは委員の皆様をはじめ、出演者をご紹介します。

はじめに委員の皆様を50音順でご紹介させていただきます。

- ・龍谷大学農学部 植物生命科学科 准教授 打本 弘祐(うちもと こうゆう)さんです。
- ・次に、一般社団法人 滋賀県医師会 会長 越智 眞一(おち しんいち)さんです。
- ・滋賀県介護支援専門員 連絡協議会 副会長 楠神 渉(くすかみ わたる)さんです。
- ・関西学院大学 人間福祉学部人間科学科 教授で死生学研究者でいらっしゃいます 藤井 美和(ふじい みわ)さんです。
- ・NPO 法人好きと生きる 理事、一般社団法人 子どもエンターテインメント 代表理事 ミウラ ユウさんです。
- ・そして今日は、若い世代からの視点で率直にお話しさせていただきたいということで滋賀県立大学 人間看護学部 3年生の 青柳 光哉(あおやぎ みつや)さんに議論に加わっていただきます。
- ・続きまして、懇話会のファシリテーターを



務めていただきます、滋賀県立大学 地域共生センター 講師

上田 洋平(うへだ ようへい) さんです。
・そして滋賀県知事 三日月大造(みかづきたいぞう)でございます。

それでは、開会にあたりまして、滋賀県知事 三日月大造より、一言ご挨拶と本懇話会設置にかかる思いをお話しさせていただきます。

○三日月 大造

あらためまして皆さんこんにちは。滋賀県知事をさせていただきます。三日月大造と申します。

まずはコロナ禍において各地、それぞれのお立場で賜っておりますご理解、ご尽力、ご協力に感謝申し上げたいと存じます。

今日、湖国滋賀県は午前中「琵琶湖開き」でございました。本格的に春を迎えることとなります。お預かりしております母なる湖、琵琶湖とともに、この恵みをいただきながら私たちが生きていることに感謝したいと思います。毎年、春に行われる琵琶湖の深呼吸、「全層循環」が2年確認できなくて、先月3年ぶりに確認できたということがございました。正直ほっとしたんですけども、気候変動の影響が身の周りに起こっていることを実感しています。

まずはお礼を申し上げたいと思います。こうして「死生懇話会」を設置し、皆で考えたいとご相談申し上げたところ、今日ご参加いただいております委員の皆様には快くお引き受けて

頂き、今日も大変それぞれにお忙しいところお時間をいただきました。また今日に至るまで様々なインタビューに応じていただいたり、色々なご経験に基づく、またご専門からの貴重なご示唆を、この懇話会にいただいてまいりました。心から感謝を申し上げたいと思います。

また今日はオンラインでご聴講頂く方々が200人近くいてくださいます。県庁がこうして設置する懇話会では異例の多さで、この注目・ご関心の高さに驚きつつ、大事なテーマなんだなということを実感させていただいております。

今日は、この懇話会をご聴講、傍聴いただき、後で感想をいただくことのみのご参加になってしまいますが、今後はできる限りご参加いただいた方々からのコメント等もいただきながら進める双方向のシステムを作っていければと考えておりますのでよろしく願います。

私がこの「死生懇話会」、死生について考える場を作ろうと思うに至った思いを3つ申し上げて後の議論につなげていければと思います。

まず1つ目は、私は今生きています。当たり前だと言われるかもしれませんが、おかげさまで皆さんと共に生きています。昨日は啓蟄でしたけれども、虫たち鳥たち、さらには動物、植物、あらゆる生き物と一緒に生きています。

母が生んでくれたから私がいますし、その母が父と結ばれたから私が生まれました。私と結ばれた妻との間に3人の子どもがいます。子どもが生まれ、この手に抱いた時に、自分以外の生、生きているということ、大事な生のぬくもりを強く意識いたしました。

20年前に父が病で他界した瞬間に立ち会いまして、人生が有限であることを知りました。人が必ず死ぬということも知りました。正確に言うと、知ってはいたんですが『刻まれた』というのが正確な言い方かもしれません。このような経験は誰にでもおありかと思えます。ぜひ共有できればと思います。

個人的なことだから、私のことだからといって、死ぬことや死ぬことに出会ったこと、生きることを真正面から語ってこなかった面もあるんじゃないでしょうか。ぜひ生と死、死と生を自分のものとしてだけでなく、社会のものにすることができないだろうか、というのが一つ目の問いでございます。

2つ目は、死と向き合うこと、死や生を考えることは幸せにつながるのではないかという問いかけです。今、知事として、県民の皆様への命、暮らし、豊かさを考えるときに、生

きていること、老いていくこと、病と付き合うこと、そして死にゆくこと、旅立つこと、別れること…、悲しみはできればなくしたいし少ない方がよい、喜びはたくさん皆に享受して頂きたい、と考える時はありません。私たち全ての人間が迎える死、避けられない死を忌み避けることなく、遠ざけずに正面からとらえて向き合うことで、学ぶことや働くこと、また生きていくこと、生きていることを充実させることができるか、また一緒に生きていることにもっとも強い意味を、価値をもたらすことができないうかと思えたことが2つ目です。

3つ目は、日本の真ん中にある滋賀県で、日本の100分の1の滋賀県で、滋賀県からこの死生について考えてみたらどうだろうかと思うようになりました。おかげさまで古代から実りが豊かです。水の恵み、食べ物の恵みがあります。渡来の文化の影響も早く受けることができました。中世には戦国大名がこの地を取り合いましたし、戦いました。近代には芭蕉の句が最も多く詠まれ残されたり、ヴォーリズ先生やフェノロサ先生がこの地で多文化共生を体現なさいましたし、戦後は糸賀一雄先生が日本の福祉の思想をここで実践されました。多くの人が培ってきた、まじわってきた、この滋賀だからこそ、この死と生、誰にも訪れる死と生について考える場として、発信する場としてふさわしいのではないかと思うようになりました。

この3点のことから、死生懇話会の立ち上げを提案させていただいた次第でございます。

とはいえ、コロナ禍でこんなことを言っている場合か、死が身近になればなるほど、怖くなればなるほど、こういうことをやっているといいんだらうかと正直迷いましたし、悩みましたが、むしろ命の大切さ、つながりの大切さを実感したからこそ、この死生懇話会をしっかりと進めていこうではないかと思うに至りました。

最後に2つ申し上げますが、このようにすべきだとか、考えるべきだとか、特定の価値観を押し付ける場ではありませんし、特定の宗教ですとか哲学に基づいてこの死生懇話会をやるものではありません。ぜひ委員の皆さんのお話ですとか、これからゲストスピーカーでお招きする方々のお話を聞いて頂きながら、それぞれの視点で、これから生きていくにあたっての考え方やアイデア・ヒントを見つけ出して頂くような、そういう場になればいいなと思っております。

また2つ目といたしまして、現時点で、いつまでにこういう到達点で、こういう着地点でということを考えてこの死生懇話会を始め、運営

しているわけではありません。行政の役割ですとか、知事の役割ですとか、そういうことからすると、こういう始め方は異例だったかもしれないですが、ぜひ皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。ただ、多くの方が長生きできるようにって、そして多くの死に向き合う時代になったからこそ、行政の在り方や位置づけというものも変わってくるのではないかと問題意識を持ちながら、この死生懇話会に臨んでいきたいと考えているところです。

「千里万里的の道も一歩から」と、皆さんの知恵と力を集めて、一緒にこの懇話会を充実したものになるように努めてまいりたいと思いますので、よろしく願います。少し長くなりましたが、私からの挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。

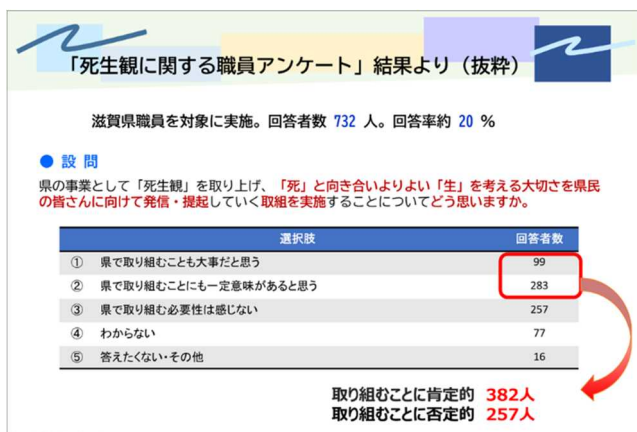
○事務局

さて、この「死生懇話会」ですが、行政でこうした取組をすることがめずらしいことであり、滋賀県でも初めての試みですので、県庁の職員の中にも実は様々な意見があるというのが実際のところです。そこで、「死生懇話会」の取組を行うにあたって、県庁職員を対象にアンケートを実施してみましたところ、様々な意見が出てまいりましたので、そのアンケート結果を一部ご紹介させていただきたいと思います。

(アンケート結果紹介)

このアンケートですが、県庁職員の約 730 人が回答し、回答率は約 20%でした。

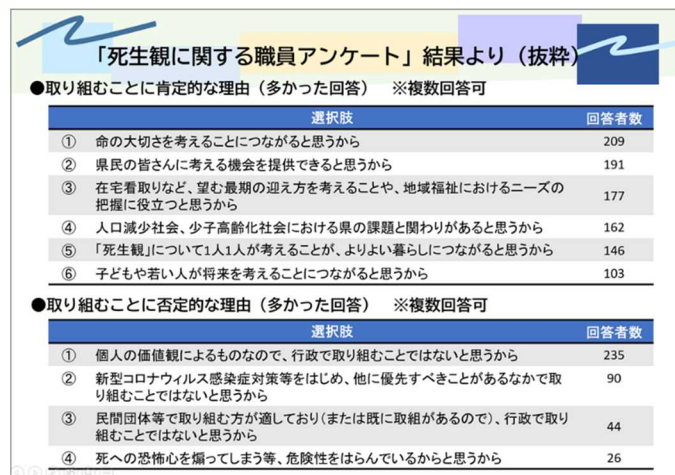
まず、この「死生懇話会」の開催をはじめ、県が「死」や「生」についての取組を行うことをどう思うかと質問をしましたところ、「県で取り組むことも大事」「一定意味がある」という肯定的な意見が 382 人、「県で取り組む必要性は感じない」という否定的な意見が 257 人と分かれる結果となりました。



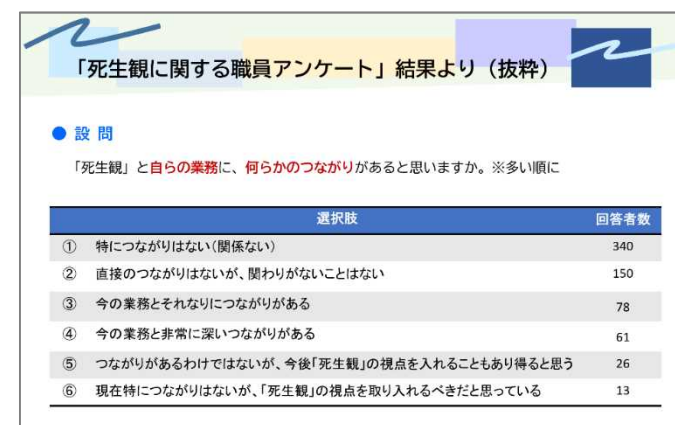
肯定的な理由として多いのは順に、①命の大切さを考えることにつながる、②県民の皆さん

に考える機会を提供できる、③在宅看取りなど、望む最期の迎え方を考えることや、地域福祉におけるニーズの把握に役立つといったことが挙がっています。

逆に否定的な理由として多いのは、圧倒的に「個人の価値観によるものなので、行政で取り組むことではない」というものでした。



それから「死生観」と自らの業務に何らかのつながりがあると思いますかという質問をしたところ①特につながりがない、が 340 人で最も多く、②直接のつながりはないが関わりがないことはない、というのが 150 人と 2 番目でした。



続きまして、県において「死生観」とつながりがある、もしくは今後出てくるのではないと思う施策や行政分野について尋ねたところ、多い順にこのような(次ページ参照)結果となっています。トップ 10 は全て医療・福祉分野ですが、たとえば 11 位「いじめ対策」、12 位「学校教育」、14 位「ひきこもり対策」、19 位「共生社会づくり」、25 位「多文化共生」、26 位「平和学習」といったように、11 位以下は様々な分野があがっております。

「死生観に関する職員アンケート」結果より（抜粋）

設問

県において、「死生観」とのつながりがある（今後つながりが出てくる）と思う施策や取組、行政分野はどれだと思いますか。（複数回答可） ※トップ30

選択肢	回答者数	選択肢	回答者数	選択肢	回答者数
① 在宅看取り	529	⑪ いじめ対策	224	⑳ 働き方改革	132
② 自殺対策	489	⑫ 学校教育	213	㉑ 児童虐待防止	128
③ QOLやQOOD	426	⑬ 循環器病対策	177	㉒ 医療保険	127
④ 健康寿命推進・健康づくり	360	⑭ ひきこもり対策	169	㉓ 生活困窮者対策	124
⑤ 地域医療の充実	358	⑮ 若者のライフデザイン等	160	㉔ 多文化共生	119
⑥ 介護サービス	351	⑯ 人権施策	159	㉕ 平和学習	110
⑦ がん対策	311	⑰ 生涯学習の充実	155	㉖ 犯罪被害者支援	99
⑧ 難病対策	289	⑱ 障害者福祉	147	㉗ 不妊治療の支援	97
⑨ 地域包括ケア	287	⑲ 共生社会づくり	144	㉘ SDGsの推進	95
⑩ 精神医療	276	㉚ 不登校対策	140	㉙ 子育て支援	94

その他意見として、「死」を考えることは、生き方や生きる意味を考えることになり、幸福度にもつながるといったものや、県民の生活を本質的に豊かにすることにつながるんじゃないかといったものがある一方で、何を目指そうとしているのかちょっとわからないとか、他にやるべきことがあるのではないかとといった趣旨の意見もありました。

このように、県庁職員だけでも賛否を含め様々な意見が出てまいりました。もちろん県民の皆様にも様々なご意見があろうかと思えます。このアンケートの意見を踏まえた議論も、本日は後半で委員の皆様をお願いしたいと考えております。

本日はオンラインでたくさんの方が聴講をしてくださっています。本日は第1回目ということもあり、まずは、委員の皆様のご自己紹介も兼ねてお考えをお伺いし、問題提起や投げかけから始めるという位置づけで、本日は聴講者の皆様からのご意見をリアルタイムで受け付けていただくことはできないんですけど、次回からの懇話会では、その場でご質問やご意見を受付し、一部ご紹介させていただくようなことも考えてまいりたいと思えます。

本日のご意見等は、ご聴講のあと、アンケートによりお聞かせいただければと思いますので、皆様ご協力お願いいたします。それでは、これから、出演者の皆様に議論をお願いしたいと思います。ここから先は、ファシリテーターの上田さんに進行をお願いいたします。

○上田洋平さん

あらたまして皆さんこんにちは。今ご紹介いただきました滋賀県立大学の上田でございます。今回このような大役を仰せつかりまして大変緊張しておりますが、一方で皆様方から死生という途方のないテーマで色々な議論、勉強をさせていただけるということで、わくわくもしております。それでは早速進めさせていただきます。

たいと思いますが、先ほど知事もおっしゃいましたように「死生」という、本当に途方もないようなテーマでありますので、あえてまとめるとか、落としどころとかを考えずに、しかも今日は第1回目ということでもありますので、皆さんと一緒に考えるための話題提供というような意味で進めていければと思っています。

最初にそれぞれの委員の方から、死生という言葉聞いてイメージされること、お考えになっているところを、それぞれのお立場とかご専門、ご活動の中からキーワードをあげて、自己紹介も兼ねてお聞きしていきたいと思えます。

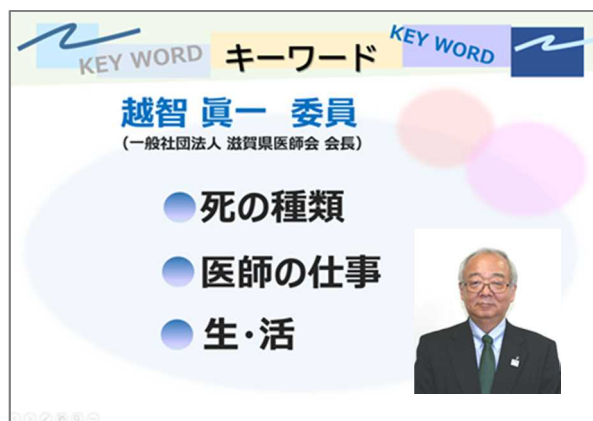
それから2番目には、先ほど事務局からもご説明がありましたが、面白いアンケートがありました。賛否が拮抗しているというような形のアンケートがありました。そうしたアンケート結果もふまえて、今こうして死生観、死生について考える意義というものについて、後半は議論していきたいと思っております。どうぞよろしくお願いたします。

それではまず最初に、各委員の皆様方から順に自己紹介も兼ねて、「死生」ということをテーマにした時に思い浮かぶキーワードを、紹介いただきながら、少しお考えをお聞かせいただきたいと思えます。大変短い時間しかお聞きできないかと思えますが、ご協力をお願いいたします。

まず滋賀県医師会会長の越智さんからお願いいたします。

○越智 眞一さん

滋賀県医師会会長の越智でございます。キーワードを3つあげさせていただきます。



キーワード①死の種類

死の種類というのは、いろいろな種類があるわけでもないのですが…。参考資料を出していただけますか？（死亡診断書を画面に表示）。皆さんあまり目にするのがないだろうと思えますが、私は開業して30数年になるんです。

が、一つの仕事として、亡くなられた方に死亡診断書を書くことが医師の一つの仕事でございます。亡くなられた時必ず遺族にお渡しする書類のひとつで、左側には死亡届というものがあります。「死」「生」というものを論ずる時に、ここから出てまいります死因の種類というものがあります。

医師の職務で書いてください ◆1欄の病名は必ず1つ以上記入してください 五訂し、欄が不足する場合は(五)欄に限り医学的診断書の増設で書いてください	病名 1無 2有	部位及び主病名 1無 2有	手術年月日 平成 年 月	平成 年 月
	死因の種類 1病死及び自然死 2不慮の外因死 3交通事故 4転倒・転落 5溺水 6煙、火災及び火傷による傷害 7中毒 8その他 9自殺 10他殺 11その他及び不詳の外因死 12不詳の死			
外因死の追加事項 ◆伝票又は補定情報の場合でも書いてください	傷害が発生したとき 平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分	傷害が発生したところの種類 1住居 2工場及び建築現場 3道路 4その他()	傷害が発生したところ 市 区 町 村	市 区 町 村

※死亡診断書の写真

「病死および自然死」というのと、「外因死」、それには交通事故、転落死、溺水、煙・火災および火傷による傷害、窒息、中毒、その他、「その他および不詳の外因死」として自殺、他殺、その他及び不詳の外因、12番が不詳の死と、約12種類に分類された死を我々は選んで書くことになるわけです。

多くの場合、病死、自然死となりますが、なんか不審な場合があった場合、この下の分類になって検案というふうになってまいるわけでございます。その診断をつけるのが大きな仕事の一つでございます。

なかなか皆さんお話しをする場合にですね、1番の病死および自然死となってくるんですけど、世の中にはやはり突然の別れ、事故であったり災害であったり、そういう突然の別れもあるということは念頭におかねばならないことだと思います。ちょっと頭の整理の意味で、この死の種類というキーワードを出ささせていただきました。

キーワード②医師の仕事

2番のキーワードの「医師の仕事」でございます。医師の仕事というのは、誰も疑うことなく「生かすこと」、患者さんを生かすことであると思われるだろうと思います。実際やることは患者さんに生きていただく、長く生きていただくということに力を注いでいるんですが、果たしてそれが正しいことだろうかという疑問を時々持つわけです。別に安楽死を肯定するわけではありません。

スイッチと一緒に、生命というスイッチを入

れることは、それが永続するという保証がありますから我々は尽力します。しかし生命を絶つというスイッチを入れたらこれは元に戻れない。私どもが一回死なせてそれを生き返らせるということはできないわけですから、それは絶対してはいけないというふうに思います。これは現在のところですね。

そうして生と死の境目に数多く出会ってきた私どもとしては、助かる命は助けよう、助けなければならぬ命は努力をしよう、そういうふうになるようになっております。大規模災害で多くの瀕死の方が来られた時にはトリアージという作業が必要になってきます。これは心を鬼にして、助かる命、助からない命を峻別をしていかなければならないと、そういう仕事も医師の仕事であります。そういう時に考えないとならないのは、心臓が動いているのが果たして生きている「生」であろうか、心臓が止まったら死なのかということも、大きく考えていかなければならないことであると思います。

キーワード③生・活

キーワードの3番は、あえて、「生」と中に“ぽつ”を置いて「活」というふうに書かせていただきました。両方とも、後ろに「きる」とつければ「いきる」ということになります。

「いきる」「生命を保っている」という意味では、今の常識では、心臓が拍動していれば「生きている」というふうなことになります。それでこの「活」というのは、いきいきとして生きる、活動しているという「活きる」であります。これは健康寿命と平均寿命との関連でもありますが、私どもの仕事は実は、この生と活との接点、この時間の差が少なくなるように尽力するのが本来の医師の仕事ではないかというふうにも思います。またこれは医師の仕事のみならず、行政周辺の仕事であるだろうと思います。

それで、この「健康寿命」という言葉をあえて私が使わなかったのは、病気であっても生きている、しゃべれなくても、動けなくても、「活」という、生きている方がおられるという事実です。そういう方のサポートをわれわれがすることが非常に大事なんじゃないかと、これが私の死生観になってくるわけです。

突然の別れというのはいつでもありうるわけです。プライベートなことを申し上げますと妻を3年ほど前にヒートショックで亡くしました。夕食を共にとって、風呂からあがってこないのを見に行ったら死んでいるという、そういう別れを余儀なくされました。聞けば患者さん

の中にもいっぱいそういう方がおられます。皆さんそれを乗り越えておられる。そしてその方たち、私も含めて、生きていた時よりも残像がどんどん大きくなっているのが現実です。だから生命がなくなっても“いきる”ということはあるんだと、そういうふうなことも考えています。ちょっと散文的になりましたが、そういうふうなことで終わらせていただきます。

○上田 洋平さん

ありがとうございます。ご自身のご経験も含めてお話しいただきました。12とおりの死の種類、そして「いきる」という言葉のふたとおりの意味とそれぞれの違い、それから医師の仕事について提起いただきました。

続いて、滋賀県介護支援専門員連絡協議会副会長の楠神さんから、「いきいきと死ぬ」といったら変ですが、「人生の最終章」「ACP」「揺れる思い」と、こういうキーワードを出していただいております。よろしく願いいたします。

○楠神 渉さん

滋賀県介護支援専門員連絡協議会で副会長をさせてもらっております楠神と申します。今日はよろしく願いいたします。私は、もともと介護老人福祉施設で勤務していたんですが、もう少し地域の方と一緒に協力できることはないかなとか、もしくは地域づくりなんかで応援できることはないかなという思いがあって、平成19年からNPO法人を立ち上げて、そちらで高齢者の支援だとか、もしくは地域づくりだとか、また私は東近江市で活動しているんですが、36か国の外国の方がお住まいなので、その子どもたちが地域の方と溶け込めるような活動ができればなと思って、活動をしています。

普段はケアマネージャーとして活動しているんですが、今日はキーワードとして3つをあげさせていただきます。

キーワード①人生の最終章

ケアマネとして活動していると、人生の最終章に関わらせていただくことがあります。生や死に対する考え方は本当に人それぞれで、10人いたら10人の考え方がある。生き方だとか、こだわり方がある。まずはそれを知ることがとても大切だというふうに感じています。そのうえで最終章をその人らしく過ごせるように、必要なチームを作る、そういう役割があるのかなと思っています。

例えば在宅で最期を迎えたい方と選ばれた方がいらっしゃったら、在宅のお医者さん、訪問してくれる看護師さん、入浴を希望されたら訪問入浴の方、ヘルパーさん、お薬のことで困ったら薬剤師さん、栄養であれば栄養士さん、本当にたくさんの方々と連携して応援できればなと思っています。多職種連携って言葉で言うのは簡単なんですけど、なかなか実際難しいところがあって、私が感謝しているのは、私が活動している東近江圏域では、三方よし研究会というのがあって、毎月80人ほどの多職種が集まって、事例報告の後、その人に対しどんなことができるのか、そのようなことを毎月毎月しています。そこではテーマで、今日あげているACPのこともあれば、最終章のこともあれば、死について考えることもある。そういうことをチームの皆さんで考えているので、いざというときにチームが作りやすいのかなと思ったりもしています。

キーワード②ACP

次にACPなんですが、自分で最終章を迎えるにあたって、事前にどうしたいのかということを確認しておくのが必要なんですけど、具体的に食事が食べられなくなったらどうするのか、延命処置を希望するのか、人生の最終章をどこで過ごしたいのか、ご本人・家族さんの意思を確認しておくことが必要だと思います。

私も実際に担当させていただいたケースで、例えば病院で最終章を迎えるにあたって、ご本人さんが自分の住み慣れた家で最期を迎えたいんだと、妻と共に大きな家をつくった、家には大切な田畑がある、また大好きな孫がいるんだと、そういうところで逝きたいとご本人がおっしゃられた時にですね、それを聞いたご家族が、「お父さんは一家の大黒柱だった、そのお父さんが言うのであれば皆で応援しよう」となり、在宅にかえて、病院では口から食べることを禁じられていたんですが、ご自宅では在宅のお医者さんの許可を得たうえで大好きなスイカを頼張ったり、あとおはぎの好きな方だったん



ですけど、お嫁さんがおはぎを道の駅に買いに行き、おもちを食べられないんですが、あんこのところだけ食べたりとか。お孫さんがおじいちゃんが大好きなアメを知っていてそれをペロッとねぶったとか、それを私、横で見ていて、病院には病院の良さがあるんだけど、在宅には在宅の良さがあるなというふうに思っていました。

それでいざ最終章、最期の時を迎えたあと、お孫さんがエンゼルケアっていうんですけど、最後の施しを一緒にされて、その風景を見た時に、ちょっと「死」ということに対して適切な言葉ではないかもしれませんが、私はそこに幸せとか温かみとか、そんなのをすごく感じました。

死というのが特別なことではなくて、普段の生活、生の延長線上に死があるような、命のバトンのようなものがもしあるとしたら、おじいちゃんからその時お孫さんに渡されたようなそんなような思いがしてその場においておりました。

ただ、そうやって望むように最期を迎える方ばかりではなくて、実際に担当したケースでも、在宅で生活されていたおばあちゃんが「私は最期まで家にいたい」ということで、皆で応援していたんですが、本当の最後の最後の時に、他府県から帰ってこられた娘さんが、その状況を見てたぶん戸惑われて、不安に感じられたんだと思うんですが、救急対応をされて、救急車で運ばれて、病院についた途端にお亡くなりになったことがあります。

私はその時おばあちゃんはどういう風に思っていたらよかったかな、息子さんやお嫁さんの気持ちはどうだったのだろうか、また娘さんの気持ちはどうだったのだろうか、と今でも考えます。私もケアマネとしてはすごくそれを悔いでいて、思いつく人には思いを伝えていたんですが、どうしてその時に、遠方の家族さんに事前にそのことを伝えていなかったのかなと今でも悔やまれます。

キーワード③揺れる思い

実際に、こういう風にと、例えば在宅でと決めていても、家族さんには揺れる思いがあります。家で逝こうと思っても、ご本人さんにしたら、息子さんやお嫁さんに迷惑をかけているのではないかと、夜苦しくなったらどうするんだろうとか、またご家族さんからしたら、ご本人さんが思ったよりしんどそうにしているとか、看護師に何度も何度も連絡しているが本当は迷惑ではないだろうかとか、そういう揺れる

思いがある。

だけどそれをなかなかお医者さんとか専門職に伝えることに躊躇される家族さんがおられますので、私たちケアマネとしては、それを代弁するというか、ちゃんとチームに伝えて、もう一度チームに集まってもらったり、もしくは在宅のお医者さんに相談して説明してもらったり、とそういうふうにして揺れる思いに寄り添いながら、その人が最期まで生きることをケアマネとして応援できたというふうに思っています。

生と死に関して私が思うことを、この3つのキーワードでお話しさせていただきました。

○上田 洋平さん

ありがとうございます。人生の最終章を今みんな支えようと、それは一人だけでなく家族だけでなく、もっと地域の人みんなで支えようという流れができていて、その最前線にいらっしゃる楠神さんよりお話しいただきました。

「命のバトン」という言葉も出てきました。また「揺れる思い」にどう寄り添っていくのか。先ほどの越智さんのお話しの中でも、いきいきと最終章をどう送っていただくのかということにつながるお話しかと思えます。

それぞれのキーワードが共鳴しはじめています。続きましては龍谷大学農学部の打本さんからお話しをいただきたいと思えます。大学の先生でもいらっしゃるし、僧侶としてもご活動をしていらっしゃるということですが、「臨床宗教師」「死生観を養う」「死者と共に生きる」、こういうキーワードを出していただいております。打本さんよろしく願いいたします。

○打本 弘祐さん

よろしく願いいたします。龍谷大学農学部の打本弘祐と申します。大津市の瀬田学舎の方に研究室がありまして、農学部の学生に今は仏教や倫理を教えています。驚かれることが多いんですが、大学の教員になるまでは、私はがん患者さんの病院や高齢者の施設の中で働く僧侶として勤務をしておりました。今も実習指導やボランティアとして活動しております。こうした存在をキリスト教では「チャプレン」と呼んでおり、東日本大震災以降は東北大学で始まった「臨床宗教師」というものがございまして、龍谷大学でも養成をしております。今、私はそちらにも関わっているのですが、最初のキーワードとして「臨床宗教師」を取り上げさせていただこうと思えます。



キーワード①臨床宗教師

この臨床宗教師は、医療や高齢者施設、被災地などで、公共の空間の中で活動するような宗教者です。その役割は患者さんや利用者さん、ご家族さん、またスタッフさんの様々な悩みを受け止める、そういう役割を持っています。ですから誤解を招いてはいけません、宗教を押し付けるということはない存在です。臨床宗教師の聞き取り調査を私は今研究としてやっておりますが、彼らは当然、信仰を持たない、無宗教の方のお考えも尊重しますし、また他の信仰を持つ方には希望する宗教者の方をお呼びするという役割も持っています。簡単に申しますと、患者さんのためにお坊さんが牧師さんと呼ぶというケースもあるわけですね。実は日本人の3割が信仰を持っているといわれます。将来的には外国人の方、ムスリムの方への対応というのでも出てきます。臨床宗教師というのはそうした方の、病院や施設内の信仰の自由も心がけて活動しています。

また死を目の前にした患者さんの中には、「なぜ私はこんな病気になったのか?」「なぜ死ななければならないのか?」という問いを持つ方がおられます。スピリチュアルペインといわれる根源的な問いです。そうした問いに対しても、臨床宗教師は、自分の宗教を押し付けるのではなくて、その患者さんの問いを、患者さん自身が見つけていかれる歩みに寄り添う伴走者の役割を持っています。

キーワード②死生観を養う

次に「死生観を養う」ということについて移っていきと思いますが、ここまでの話で、では仏教や宗教は不要であるかというところでは決してなくて、仏教はやはり長い歴史の中で、死や病、老いといった問題に対して回答を様々な説いてきました。その仏教を見直して、死生観を養うことに活かすことは非常に大切です。特に滋賀県は、比叡山延暦寺などに代表される

多くの歴史的文化遺産がありますし、その中の僧侶、源信は、『往生要集』という書物の中で看取りの作法をもう千年以上も前に書いています。それらを学ぶことは死生観を養うことにとってとても大切なことだと考えています。

ただそれでも宗教離れが進んだ現代では、仏教から自分なりの死生観を持つということは難しいかもしれません。職員さんのアンケートの中でも、「自分は無宗教である」ということもありました。中には、「親の私も死生観がわからないのに、子どもにどう死を伝えたらいいのかわからない」という方もおられました。そういう方にはどう死生観を養ったらいいのかなと思うんですね。

私は「親の私もわからない」という姿勢で子どもさんと一緒に絵本を読んではどうかなと思いました。ディック・ブルーナ作の絵本『うさこちゃんのだいすきなおばあちゃん』というのがあります。大好きなおばあちゃんが亡くなって、みんなで埋葬していくまでのお話なんですけれども、うさこちゃんが最後お墓に語りかけると、おばあちゃんが聞いてくれているのがわかる、というような話です。亡くなっても温かな絆が続いているというテーマではないかなと、親の私は、小さな子どもたちがいるんですけど、子どもたちに読みながら考えたりします。

実は死をテーマにした絵本というのはすごくたくさんあるんですね。図書館に行くと多くの本があると思います。絵本に限らず、古典や文学、音楽の歌詞等、そうした人文知の中に死生観を養うヒントがたくさんあるのではないかと思います。

そうした人文知にふれることは、私たちにとって自分の生きてきた意味や死を意味づける言葉に出会っていく、それが結果的には豊かな生につながっていくのではないかなと思います。

キーワード③死者と共に生きる

最後、キーワードの3つ目としてちょっとチャレンジングな「死者と共に生きる」というテーマをあげました。『うさこちゃんのだいすきなおばあちゃん』の絵本の中にもありますが、死を考えると、やはり自分が死ぬよりも家族や親しい人に死なれるほうがつらいということがあります。正直私もそうですし、実は親鸞も同じでした。親鸞は、人間の様々な苦しみの中でも愛する人との別れが一番つらいんだということを言い残しているんですね。そうした愛する人との別れの際に行う、死者への儀礼、すなわち葬儀や法事、それからお盆やお墓参りと

いった伝統的な弔いの文化が、実は私たちの悲しみを転換させていくとても大切なこととして、今、国内外の研究者からも見直しが行われています。

また宗教色を抜いた死者への儀礼として、ホスピスや緩和ケア病棟では患者さんが亡くなったあとにお別れ会を行う所もあります。そして遺族を支えるための集いを開いている病院なんかも実はあるんですね。

そして伝統的な死者への儀礼、またあらたな死者への儀礼というものを考えていくこと、またそうした死者を縁として残された人たちが新しい人間関係を築きなおしていく、再構築していく、そうした機会があることは非常に大切ではないかなと思います。

そういった中で、実は死者という者には、私たちの間に肉体としてはもう会うことはできないですけど、亡くなったとしても継続した絆というのがあるんだと思います。それは“さまよう霊”ということではなく、実は大切な人は、「亡くなくても私をもって働きかけてくれている存在」、そうした意味としての死者であると。

私もプライベートでは、今日の青柳さんぐらいの年齢の時に1歳下の後輩を亡くしました。その亡くなった彼女の葬儀を私自身がしたんですが、まさに私にとって刻まれた死でありました。そしてその彼女自身が、今は死者でありますけど、私の心を動かしたり、背中を押したりしているなど思うことがあります。きっと皆さんの中にも死者をそう思う方がいらっしゃるかと思います。私はそうしたことを「死者と共に生きる」というふうに表現しています。「死者と共に生きる」ということは、誰もが誰かを亡くした方であると、そういった他者への温かな眼差しにかわっていくと思います。それが私たちの社会を豊かに、そして温かくしてくれるのではないかと私は思っております。私からは以上とさせていただきます。

○上田 洋平さん

ありがとうございます。まさに「死生」といえば最初に「宗教」、あるいは僧侶の方とか牧師さんが浮かぶという方もあるかと思うんですけど、現代、あるいは未来における宗教の役割は何か、あるいはお寺、滋賀県は特に多いわけですがそういう宗教施設の役割、それから「親がわからないのにどうやって死生について教えるのか」ということ、これは死生の教育という側面からの提起かと思います。もう一つ重要な観点がでていたと思うのは、弔いの文化をどう

継承するのか、あるいは創造するのか、こういうことも重要なキーワードだと思います。ありがとうございます。

では続きまして、NPO 法人好きと生きる理事のミウラユウさんからお話をいただきたいと思います。キーワードは「共生とは?」「命を大切にする」「多様性、違いを認める」、この3つです。ミウラさんよろしくお願いします。

○ミウラ ユウさん

よろしく申し上げます。私は滋賀県を拠点に子どもや若者の居場所事業を主に行っています。「NPO 法人好きと生きる」の理事をさせていただいています。また福祉とエンターテインメントの融合を目指して「子どもエンターテインメント」という一般社団法人の代表もしております。

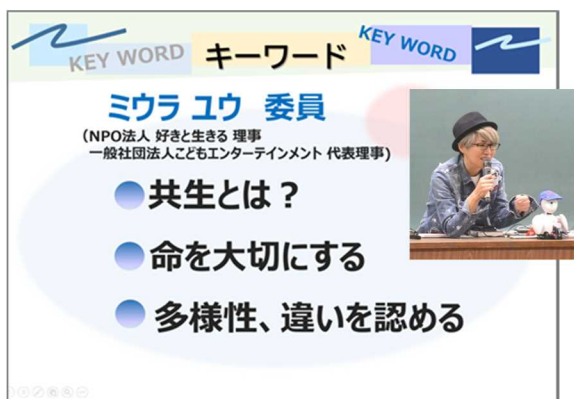
今日の懇話会がスタートする前に、登壇者の打ち合わせがあったんですけど、三日月さんが「今日はお互いの立場や肩書きに関係なく、対等な人としての関係性の中でお話しをしよう」というナイス提案がありまして、私は内心「助かった!」と思ったんですけど、登壇者のそうそうたるメンバーの中で、私は何者でもなくて、学術的なことも語れませんし、何かを勉強したとか何かの専門家でもないんですが、ただ言えることは、私も生きている人間であって、皆さんと一緒に、同じように生きづらさを感じたりとか、生きることが困難であったりとか、そういうことが皆さんと同じようにあるんだよという当事者であるということが言えると思うんですね。

その中で、生きるとか死ぬとかいう話を、どれぐらいフランクに語ったらいいんだということがすごく難しいと感じたんですよ。あんまりカジュアルに語ると不謹慎だみたいな感じになるかもしれないし、必要以上に誤解させてしまう危険性もあるかもしれないし、かといってすごく深刻に語っていったら打ち破れないというか、ブレイクスルーできない感じもするので、私の立場でどれぐらいできるだけフランクに、楽しくといたら何ですけど、面白く話ができるかなということを考えてお話しさせていただこうと3つのキーワードを考えてみたものの、これらを話していると全部つながっていて、カテゴライズできるものでもなく、根幹はみな一緒というところに自分自身がたどり着いてしまったという感じなので。

まず、私が話をさせていただきたいのは、私は物心ついたときから、自分の生まれ持った性別に違和感がありまして、大人になってから性

同一性障害という診断を受けました。自分の性別に違和感を持ちながら不妊治療を長らく受けまして、息子を授かりました。体外受精で生まれた子どもは、心臓に重い障害がある障害者として生まれてきました。そういうことで、命ってなんだろう？ということに向き合わざるを得ない機会が私にはすごくたくさんあったと思います。

心臓という臓器は、一番最初に生命の誕生とともに動き出す臓器なんだそうです。死ぬまで止まらない、要するに心臓が止まったら死ぬと、そういう臓器であると聞いて、その心臓に重い障害を持った人が生まれてきたことで、またさらに生命のことについて考える機会となりました。



キーワード①共生とは？

それでまず「共生とは？」みたいなこと、ダイバーシティとか、インクルーシブとか、いろんな難しい言葉があったり、最近では公序とか、共助とか、そういうようなことも聞かれます。

それで共生とはなにかを考えた時に、私は答えにはたどりつけなかったので調べてみました。そしたら【一緒に生きていくこと。異種の生物が相手の足りない点を補い合いながら、生活する現象】と書いてあったんですよ。それで「え～！？」とか思って、当たり前すぎて。一緒に生きていくことという説明が一番にあったのが当然のことすぎるのに、なぜ、こんなに共生社会を作ろうとか、共生、共生と言わないと一緒に生きていけないような社会になってきているんだろうと。ここをキーワードというか起点に、この死生懇話会の中で、私の考えや体験したことをお話しできたらいいなと思っています。

キーワード②命を大切にする

あともう一つ、「命を大切にする」っていうことも、私自身が自分を肯定できなかった、自分の性別がわからなかったことで、子どもの時

からできたら死にたいとか消えたいということをよく考えていたので、そのたびに言われたことが、「自分を大切にしてください」とか「命を大切にしてください」とか。たぶん悩んでる友だちとかにも、「自分を大事にした方がいいよ」とか声掛けしちゃってると思うんですよ。でも具体的に命を大切にすることってどういうことって、どういう行動が命を大切にすることなんですかって言われたら案外具体的なことのアドバイスはできないし、自分でもわからないし、実際どうすることが「命を大切にすること」になるんですかっていう疑問が私の中にもまだある状態です。そのことも皆さんと考えていけたらいいなと思うんですが、自分を大切にするという行動は、自分を認めることなんだろうなとうっすらわかっているんですが、それ以上に自分ではない周りも、それこそ共生している、一緒に生きている人たちのことも認めることかなと、それは次の多様性・違いを求めるというキーワードにつながっていくんですが。

キーワード③多様性・違いを認める

多様性とか違いを認めましょうと、これもよく言われるんですが、多様性とか違いがあることが当たり前のはずなのに、わざわざ多様性とか違いを認めましょうと声高に言わなければだめっていうことが、さっきの「命を大切にする」「他者の命を認める」ということができていないから、この多様性に関して大きな声で言わないと考える機会が持てないことになっちゃってるだろうなと思うんです。

要するに自分と同じ人間、クローンみたいな人はありえないわけで、人種とか日本人だとかそういうカテゴリーはある程度あるにしても、この地球上、自分と同じ人は一人としていないわけだから、多様性があって当たり前だし、違いがあって当たり前だし、それは認めるも認めないも、そこにそういう人が生きているんだから、それは当然であって、その人たちと一緒に生きていくということ、足りないものを補い合って生きていくこと、それが共生社会なんだろうなというふうに思うので、こういうところを自分の体験したこととかをもとに、皆さんとお話ししていけたらいいなと思っています。

ちょっと雰囲気が悪くしたか良くしたか、今「すべったかな」と思って（笑）。全体の様子が見えないもんで、聴講者の顔も見えませんから、非常に冷や汗がすごい状態なんですけど、こんなふうにして私は皆さんと同じ立場なので、自分が感じたままのことを専門的なことをすっ飛ばして話をします。どうぞよろしくお

願います。

○上田 洋平さん

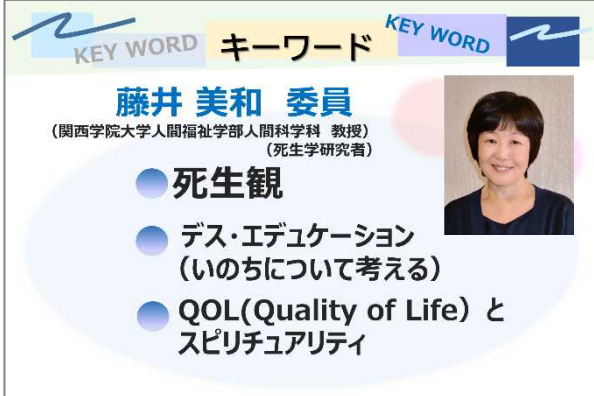
ありがとうございます。全然大丈夫です。すべってません。すべってませんというか、だいたいこれ始まる時の音楽（BGM）がですね、葬式かという、これ一つの死生に関するアンコンシャスバイアス（無意識の偏見）みたいな、ごめんね事務局の人。死生について考えるといったらベートーベンの「悲愴」（2楽章）という音楽でしたけど、チャットでもつつこみが早速入って、一番目のつつこみが「葬式か」という話があったぐらいで、我々の中にしみ込んだ「死生」に対する考え方、これを、枠を外して一度話していこうというのも今回の趣旨になると思いますので、全くご心配いただくことはないし、知事もおっしゃっていたように「まとめなくていい」と。そういうことですので、忌憚なくお話しいただければ。そういう意味で我々全員が「死」については素人ですから、自分の死なんか経験したこともないし。ミウラさんから、共生、命を大切にする、多様性・違いをみとめるという、我々がふつうに、あるいは好んで、そして自明のものとして使っている言葉について、それは具体的にどういうことで、どうすることなのか、改めて問題提起いただきました。

それでは、続きましては、関西学院大学教授で、まさに死生学の研究をしていらっしゃる藤井さん、よろしく願います。

○藤井 美和さん

みなさんこんにちは。関西学院大学の藤井美和です。私は大学で死生学とかデス・エデュケーションという科目を教えています。もともとこういう学問をしていたわけではなく、大学を出てからは会社で働いていたんですね。そこで、命について考える大きなきっかけになった出来事がありました。媒体の仕事をしていたんですけど、ある時、原稿を書いていた時に急に頭が痛くなって、手がしびれて、3日間で全身麻痺になってしまいました。指一本も動かない、まばたきもできない状態で救急病棟に運ばれたんです。体は麻痺しているんですけど、意識障害はなくて、主治医の先生から、「藤井さん、今晚はどんなことでもしてあげるからがんばりなさい」と言われたんですね。その時に自分はものすごく厳しい状態なんだっていうことを察知しました。その時、何が心の中から湧きあがってきたかという、あんなに一生懸命

していた仕事のことでなくて、「私は何のために生きてきたんだろう」という思いだったんですね。「私の人生は何だったんだろう」と。3日間で全身麻痺になってしまったんですけど、3日前までは自分の人生、すごく意味がある、ぐらいに思っていました。でも死に直面してはじめて、「自分の人生とは何か」とか、「生きるとは何か」という問い、今まで頭ではなんとなく考えていたようなことだったんですけども、本当にまさに突きつけられるっていう経験をしました。



それが死生学という方向に進むきっかけとなりました。

キーワード①死生観

死生学の中での「死生観」というのをまずキーワードとして出ささせていただきました。死生懇話会のまさにその中核なのかもしれません。これを行政がすることについてどう思うかというアンケートを先ほどご紹介いただきましたけど、「個人の価値観なので行政で取り組む問題ではない」という方が多かったり、あるいはデスエデュケーションについては、わりと好意的に捉えているけれども、反対の方の中には、「死への恐怖心を煽ってしまう」とか、多感な時期、これ子どもさんのことだと思いますけども、「多感な時期に死を想起させるのは危険性をはらんでいるから」というような反対意見がありました。こういうことから見えてくるものは何かというと、「死生」という「生き死に」の側面ではなく、「死」に焦点だけが当てられて、その恐ろしさというんですか、それがクローズアップされている。つまり「華やかに生きる」、あるいは「いきいきと生きている」その「生」を破壊するのが「死」だと。だから「死」を考えると怖くなっちゃうとか、苦しくなっちゃうという発想が生まれるのかなと思いました。

けれども、先ほど私の経験からお話ししたよ

うに、「死」というものを突きつけられて、いかに生きるっていうのが見えてくると思うんですね。例えば、今日皆さんがこの懇話会が終わって、「気分が悪くなったわ」となって病院に行かれて、がんが進行しているなんていうことがわかって、あと半年の命ですよと言われてたしたら、どうでしょう。多くの方は、人は生き物だから必ず死ぬということはわかっているんだけど、半年の命と言われて初めて、死ぬということが自分の問題になるわけですよ。おそらく多くの方は、残された半年をどう「生きようか」と考えると思うんですね。つまり、「死ぬ」ということがあるからこそ、私たちは与えられた人生をどう生きるかという問題に向きあうことができる。これが300年も500年も生きてよとなったら、どうでしょう。死ぬということがあるからこそ、私たちは生きるということに向き合うことができる。そのように考えますと、「死」は「生」を壊してしまうような怖いものではなく、むしろ人間っていうのは必ず死ぬわけですから、死があるから、「死も含めてどう生きるのか」、つまり「死に方も生き方の一番大切な部分」だと言えるのですよね。ですから「死も含めてどう生きるのか」を考えるという意味で「死」をとらえることが、私たちが人生に向き合う原点になるのではないかと思います。

そう考えますとみんなが死を背負って、死を含めてどう生きるかということに向き合うことになるので、死はご病気の方とか高齢者の方だけの特別な問題ではないのですね、もう生まれた時から、あるいは生まれる前から、子どもも青年も。全ての人の問題。生きるのが苦しい、消えたいと思う人いっぱいいますよね、働いていてもしんどい人もいます、病気になる、障害になる、親を亡くす、色々な人生の中で歳をとっていく・・・死を含めて生きるのは、全ての人の課題だと思います。

だから、「生と死について考える」ということをわざわざ出してこないといけないこと自体、私たちが死を追いやってきたことに原因があるんじゃないかと。私たちは全員死にますからね、だから生と死をとらえるという視点を、何か怖いものを引き出すという捉え方ではなく、そもそも私たちの在りようというところで捉えていく必要があるんじゃないかと考えています。

キーワード②デス・エデュケーション

ちょっと時間がなくなってしまったので、デスエデュケーションのことを少し言って終わり

にしたいと思います。こういったことについて考えるのがデス・エデュケーションだと思うんです。ずいぶん前ですけど、私は兵庫県の教育委員会で、「命の大切さを実感させる教育プログラム」の構想に関わったことがあります。教育委員会の方々と一緒にしたんですけど、でもそういうことをいくらやったとしても、委員会で最後は、結局、教える側がどんな死生観を持っているのかが一番重要だということに行きついたんですね。

教師が色々なマニュアルを持っていたとしても、子どもってすごく素直なので、「先生どうして死んだらあかんの?」とか「先生はなんで生きているの?」とか、率直なことがいっぱい出てくるんですね。その時に「命は大切よ」とか「みんな平等な命よ」って言ったとしても、それは学校ではその先生はそう言ってるかもしれないけど、家に帰れば子どもにいい学校に行かせようと思って塾に行かせたり、習い事をさせたりしているわけですよ。そうすると本当に命について教える人が、どんな死生観、どんな人間観、人の幸せをどうとらえるかということ抜きにして命について語るということとはできないと、そういう議論になったんですね。

私がこの懇話会でみなさんと共有したいと思うのは、やっぱり自分の問題として捉えること。自分の存在価値とか相手の存在価値とか、結局、自分の死生観や人間観から生まれていると思うんですね。そこに、自分の嫌なところにも目を向けない限りは、この話は進まないんじゃないかなと思っています。そういったところから参加させていただけると嬉しいなと思います。

キーワード③QOLとスピリチュアリティ

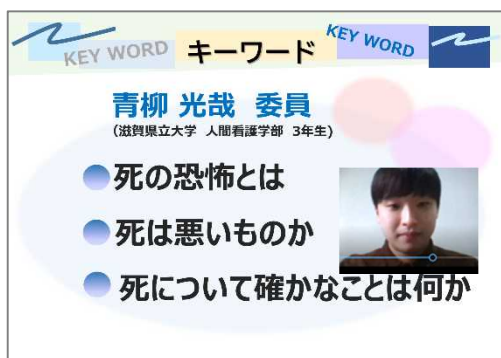
○上田 洋平さん

ありがとうございます。まさに死生学の研究をされる中で、この懇話会の意義にも少し触れるご意見を頂戴したかと思っています。死を突きつけられてはじめて、何のために生きるのかということが前に立ち現れてきたり、死に直面する中で、今までのものがある意味、丸裸にされて、自分の人生、生きるということに向き合うことになったと。「QOLとスピリチュアリティ」、これについてはまた後の議論の中でも触れていただけるかと思っています。ありがとうございます。これまで5名の皆さんにお話をいただきました。それでは今度は学生委員として参加してくれています青柳さんからお話をお聞きしようと思います。大変緊張しているようです

が、しかし頷きながら、贅沢な授業を受けているというような感じで聞いてくれています。青柳さんは「死の恐怖とは」「死は悪いものか」「死について確かなものは何か」、という、本当に根源的な問いをキーワードに出してくれました。では青柳さんよろしくお願いします。

○青柳 光哉さん

滋賀県立大学で看護師になる勉強をしています学生青柳と申します。本日はよろしく願います。僕も勉強中ではあるんですけど、まだまだ専門的な知識はないので、今回「死」についてということで、3つ自分の中で疑問に思ったことをキーワードにあげさせていただきます。



キーワード①死の恐怖とは

まず、「死の恐怖とは」ということですが、僕は、看護師になるための実習を、先月末まで半年間、病棟の方で行っていました。病棟では実際に患者さんを受け持たせていただくという感じで、患者さんとコミュニケーションだったり、援助に関わらせていただきました。2月末に緩和ケア病棟に実習に行かせていただいた時の話なんですけど、はじめて患者さんとコミュニケーションをとるとなった時に、患者さんが呼吸が苦しいということをすごく訴えていたんです。その時に看護師さんに「死ぬのが怖いです」という言葉をその患者さんがぼそっとこぼしました。僕はその言葉を聞いて衝撃を受けて、初めて人から「死ぬのが怖いです」と言われて、僕にも死が近づいたように感じて、とても怖いと思いました。

じゃあどうして死が怖いというふうに思ったんだろうというのを、あとで振り返った時にすごく感じて、もし自分が死んでしまったら、それは何で怖いんだろう、体が痛くなっていくから死ぬのが怖いんだろうか、死んでしまって人とのつながりが断たれてしまうから、それが怖いんだろうかとか。「死ぬのが怖い」「死の恐怖」という言葉はとても漠然としたものなんじゃないかなと感じました。死の恐怖は人それぞれ

の理由があるのではないかなと感じました。

キーワード②死は悪いものか

もう一つ、「死は悪いものか」ということなんですけど、僕自身は、死について、生まれた時から自分に備わっているものではないかというふうに考えています。もちろん僕は自分が死ぬのではないかという経験を今までしたことはないんですが、外から与えられるというよりは、自分の中から死が出てくるものなんじゃないかなと考えています。

幼少期に、祖母が亡くなった時に、母親から「死については学校であまりそういう話はしないのよ」と言われたのをすごく覚えています。「死は避けなければならないことなんだな」とそこで思ったんですけど、一方で、高校の時に友人の母親が亡くなった時、その後、友人は母親の死を乗り越えて医師になりたいと言って努力しているということがありました。死を語ることは悪いことだと親には言われていたけど、でも友人は母親の死がきっかけになって医師になるという夢を獲得したというか、夢を持つことができたということで、死がもたらすものは果たして悪いものなんだろうか、死を語ることは本当に悪いことなんだろうかという疑問を覚えました。

キーワード③死について確かなものは何か

最後3つ目なんですけど、「死について確かなものは何か」ということを挙げさせていただきます。今回、死生懇話会のお話をいただいた時に、頭をフル回転させて考えたんですけど、もし自分以外の誰か、例えば自分の親とか兄弟が死んでしまった時に、自分はその人が亡くなってしまったんだってということが見ていてわかるんですけど、逆に自分が死んでしまったら、自分はそれをわかるんだろうかという疑問があって、先ほど、越智さんが「死には突然死もある」というふうにおっしゃっていたんですけど、自分が寿命で亡くなるか、それとも交通事故で亡くなるかわからないんですけど、その瞬間、自分は果たして死を自覚できるんだろうかということと、主観で死がわからないんだら、死について怖いってというのは何だろうって、「死の恐怖」につながる疑問なんですけど、主観での死について自分でわかる範囲というか、わかることって何なんだろうかって、それを明確にしたら、もう少し死の恐怖がやわらいだり、何か死の恐怖についてわかることがあるんじゃないかなって考えて、今回キーワードに挙げさせていただきます。

○上田 洋平さん

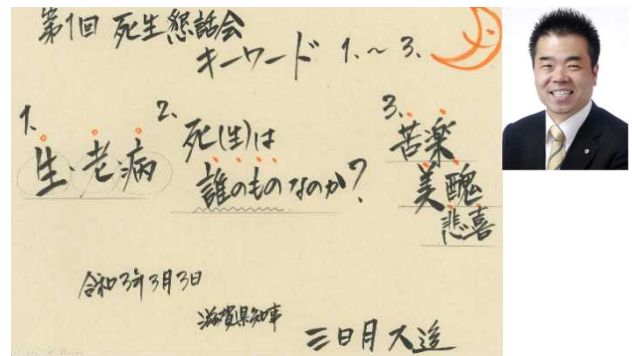
ありがとうございます。なんかすがすがしい問いですね、青年らしい、でも勉強になりました。「自分の中から死が出てくる」なんて言葉なかなか言えないんじゃないかな。8時間ぐらいいしゃべりたいなという感じですけど。あらためて前の5人の委員の皆さんのお話を聞いて青柳さんの話を聞くと、またぐんと深まったような感じがしますね。そして、青年が一度は誰もが考える問題を、今まさに人格形成期にいる青柳さんが考えている、またそういう人が看護師になろうとしているのが頼もしいなと思いました。ありがとうございます。ここまで6名の委員の皆さまからお話をいただきました。ではこのパートでは最後に、三日月さんから、しかも手書きのキーワードを頂いております。

「生・老・病」「死（生）は誰のものか」「苦楽、美醜、悲喜」、こういうキーワードであります。今まで委員のお話を聞かれた感想も含めて、少しお話をいただきたいと思います。

○三日月 大造

ありがとうございます。今まで6名の方のお話をお伺いするだけでも、とても何か、自分自身の考えるものさしというか、そういうものが頂けたんじゃないかなと思いましたし、この会場、これで75分ぐらい、こちらの県庁側の会場があるんですが、ほとんど物音ひとつせず、皆さんからの話をシーンとしてお聴きいただいているんですね。一言もさらず大事に聴こうという皆さんの姿勢のようなものを感じさせてもいただいております。聴講いただいている方々の心にも届く言葉がたくさんあったんじゃないかなと思います。それで、最後に青柳さんが言われた3つの言葉、なかなか考えさせられました。「死は怖いものなのか」「死がもたらすものは何か」「死は自覚できるのか、自分は何かわかるのか」、この3つの根源的な問いは、この死生懇話会をこれから進めるにあたって、委員の先生方やゲストスピーカーの皆さんと考えていきたいテーマだなと思いました。

すみません、私のキーワードは、冒頭思いをたくさん述べましたので、多くを述べません。汚い字で申し訳ないです。事務局に一昨日までに出すように言われていたので、皆さんと同じようにパワーポイントで綺麗にまとめてもらえるのかと思っていたら、そのまま出されてしまいました（笑）



キーワード①生・老・病

キーワードはそのとおりで、死にいたる「生、老、病」というものを考えるきっかけになればなという思いとか、

キーワード②死（生）は誰のものなのか

あと、冒頭にも申し上げましたが、自分にとって大事な「死」「生」であると同時に、周りの方々にとって、社会にとって「死」や「生」はどうあるべきなのか、どう考えたらよいか。

キーワード③苦楽、美醜、悲喜

とはいえですね、3つ目にあるように、先ほど打本さんがおっしゃったように、源信の『往生要集』なんかを読んでいると地獄のことが書かれていたり、あと身の周りで皆さんのお悩みを聞いていると、楽しいことばかりではなく、やっぱり老いは苦しいし、ある意味では醜いし、そして悲しいし、とどちらかというネガティブなイメージで捉えられることが多いので、そういうものからも目をそらさずに、見ることによって、何か考えられるような場になればなあと。

それと同時にせっかく今生きているんだから、一緒に生きているんだから、お互いがお互いの生というものを大事にし合えるような、そういう流れなり関係ができたらいなということをおもわせていただき、キーワードにまとめさせていただきました。

ただいづれにせよ、この前半だけでかなり色々なテーマを出していただいたので、これからの討論なりディスカッションなりがより楽しみになったところです。ありがとうございます。

○上田 洋平さん

ありがとうございます。ここまで皆さん方に、それぞれのお立場の中からキーワードを出していただきました。本当どれも一つ一つ深めていくと、もっともっと時間が必要ということで、これらのキーワードをまた整理しながら、

2回目以降にじっくりとそれぞれ出されたキーワード、それぞれのお立場から、さらに深めていくということにしていきたいなと思います。今日は、委員の皆さんのそれぞれの考えとか背景を知っていただけたかなと思います。

ということで一旦ここで休憩をはさみます。

(5分休憩)

○事務局

それでは再開させていただきます。前半に引き続き、上田さんよろしく願いいたします。

○上田 洋平さん

では引き続き、私の方で進行をさせていただきます。最初に事務局からアンケートの結果を出していただきました。大変おもしろいアンケートだったので、それについてお話をしていきたいと思いますが、その前に第1部のおさらいも兼ねるという意味で、私も僭越ながらキーワードを用意させていただいております、ちょっとだけで話したうえで進めていきたいと思えます。

以前打ち合わせをしたときに話したことを拾って下さって、さきほど知事が紹介下さいましたが、「死は誰のものか、生は誰のものか」、それから青柳さんと少し関わるかな、あるいは打本さんがおっしゃったことにも関わるとおもいますが「死をわかちあう」ということ。言い換えると死の文化、弔いの文化。それから最後はちょっと挑発的ですが、「誰が死を殺すのか」という3つです。

KEY WORD キーワード KEY WORD

ファシリテーター 上田洋平さん
(滋賀県立大学 地域共生センター 講師)

- 死(生)は誰のものか?
- 死をわかちあう
- 誰が「死を殺す」のか?

まさに、この後議論をしたいのですが、アンケートの中で、「死生」は「個人の問題」で、「死生観」は「個人の思想・信条の問題」なので、行政で議論するのはそぐわないのではないかなという意見があったし、あるいは「くれぐれも慎重に議論すべきである」という声もありました。確かにそのとおりだと思います。

一方で新型コロナウイルスをめぐって、私たちは政治とか政策が個人の死に直結しているということ、あらためて経験しています。そういうことを考えると、そもそも死や生は昔から個人のものであったのか、もしそうでなかったのならいつからそうなったのかということがあるんじゃないかなと。ひょっとしたら「死は個人のもので、個人の思想・信条の自由だ」ということも、「死」や「生」をめぐるアンコンシャスバイアスになるのではないかなと、この懇話会ではそういうことも問い直したいなと、これについてこの後話をしていきたいなと思っています。

じゃあ一方で、「死」を行政、社会がコントロールすることになると、全体主義、あるいは最悪の場合、戦争ということになっていくわけですから、そのへんの死の社会化、知事が最初のメッセージでおっしゃった「死」をどうやって社会の中でとらえていくかという観点もあるかなと思います。

キーワード②死をわかちあう

2つ目はこれはまさに、自分の死を自分で経験することはできない。痛いなというところまではわかるかもしれないけど。そうすると人間は、「死」をもわかちあう存在ではないか、こういうことを考えて、そのやり方がいろいろな文化、宗教、そういうものなのではないかなと、これも議論したいと思えます。

私は、結婚する時、指輪をはめる時にですね、「死が二人を分かちまで」という約束をして結婚したんですけど、そう言いながら、神父さんには悪いなと思いつつ、「いや、死を分かち合うのも人間なんじゃないかな」とこんなことを考えていました。

あるいはバトンタッチという言葉が出てきた。「死を分かち合う」ということを、個人から社会に広げて考えるとわれわれは社会全体でこれまで蓄積してきたものをどうバトンタッチするか、少子高齢化の中で、それをどうするか、広く考えるとそれも死・生の問題なんじゃないのかというふうに思うわけです。

キーワード③誰が「死を殺す」のか

それから「誰が死を殺すのか」というのは、死生ということにはこれからますますテクノロジーの問題も関わってくると思うのです。寿命がどんどん伸びる、医療が発達する、その中で死をどう考えていくのか、あるいはどう乗り越えていくのか。テクノロジー

によって寿命が伸びる。「不死」ということもひょっとしたらあり得るかもしれない。けれども我々は、家族とかコミュニティによって「不死」の存在になったり「生き続ける」ということもあったのではないかと、こんなことをちょっと考えました。

青柳さんが、「自分の中から死が出てくる」というような話をされましたが、「死」そのものもひとつの「発明」なんじゃないか、生きるための生命の発明なんじゃないか、こんな論点でも、いずれ話をしてみたい。

さて、ではここからは、時間の許す限り、じっくり話をさせていただくのは難しいかもしれませんが、最初の議論として、せっかく興味深いアンケートの結果があったので、それをふまえて話をしていきたい。

賛否拮抗している、ということでありました。その中でどちらかといえば否定的、慎重な意見の中で、圧倒的に理由として多かったのが、「死は個人的なもの」というような話であったかと思いますが、それも踏まえて、今この時代に死生を議論することの意義、意味、それも行政、県がその場をもうけて議論するという意味や意義について、ちょっと意見をお聞かせいただきたいなと思います。

まず藤井さんからお聞かせいただきたい。QOL やデスエデュケーション、教育ということとも絡めて、あえて行政で「死生」について議論する意義についてお話いただけますか。

○藤井 美和さん

個人の問題であるから行政が関わらないというのは、わかるようで、ちょっと不思議な感じもするんですね。死生観っていうのは生まれたばかりの赤ちゃんが持っているわけでもないし、子どもでも死生観とか「生」や「死」について、何らかの考えを最初から持っているわけではないですよ。ということは、今私たちが「生」とか「死」について持っている考え方、例えば、安楽死の問題にしたって、臓器移植の問題にしたって、いじめ自殺だって、虐待だって、自殺、自死、とにかく全ての命にかかわる問題というのは、はじめは触れられてない。ところがいつの間にか、何らかの考えを持つようになる。どこからきているのかというと、これは社会の価値観が埋め込まれていくんだと思うんです。例えば「寝たきりになったらおしまいだよ」とか、「障害を持って生きるのは大変だから障害

はない方がいいよ」とか、社会から受けた価値観が自分たちの価値観を作っていくんです。ですから、個人の価値観と社会の価値観が別だとか、個人と行政が別ですということはありませんというふうには私には思います。

では社会の価値観はどうやってできるのか、というと、「社会」という人はいませんよね。社会の価値観は何でできているかというところ、これは多数の個人の考えだと思います。安楽死がいいとか、自殺も一つの生き方だとか、障害者はかわいそうだとかいうことをたくさんの方が思っているから、そのような社会の価値観ができあがっているのです。個人が社会の価値観を作っているし、その社会の価値観が、新しく生まれてきた、あるいは共同体に参加する子どもたちに受け継がれていくということだと思えますね。

だから個人と社会の価値観というのが別ということもないし、共同体として生きるのであれば、個人の生きること死ぬことについての問題を社会が考えていかないといけない。それは社会という人が考えるのではなくて、社会の構成員である一人一人が考えるということだと思えますね。だから行政の中で死を扱うことに注意しなければいけないといっても、虐待で子どもは死んでいるし、事件、災害いろいろなことがあるわけで、それを何か別物としてとらえた途端に、(生きること死ぬことへの)アプローチがとっても難しくなっちゃうんじゃないかと思うんです。考えたこともないことだから。

だから逆に言うと、自分自身がどう考えているのかということを一回よくよく考えてみる、どこからこの価値観をもらったのか。さっきおばあちゃんが亡くなった時に、青柳さんがお母さんから「そういうことはあんまり言わないのよ」と言われて、「ああそうなのか」と思ったり、お友達から「僕は医師になりたい」と聞いて「そういうのもあるんだ」と思ったり、やっぱり私たちは周りの人や環境から影響を受けている。では次の世代に私たちは何を伝えるべきかという問題も出てくるし、子どもが尋ねた時にそれを開いた議論にすることも社会の責任ではないかと思えます。

○上田 洋平さん

それでは続いてミウラさん。ミウラさんはまさに最前線で、メールなんかで「死にたい」という人のお話を聞いたり、そういうことに向き合ってらっしゃる。

○ミウラ ユウさん

性別違和などがあって、自分を肯定できない若者たち、もしくは障害の子どもを抱える保護者の人たちから、やっぱり生きるということや、死ぬことに対する困難さ、死ぬことすらも難しいという障害者たちの声を聞いたりということをして15年ぐらいにわたってしてきましたんですけど。先ほど藤井さんがおっしゃったように、私たち一人一人が集まった社会という、社会は何で構成されているかという、私たち一人一人なんだということを考えた時に、県庁の中で行われたアンケートの結果で、「個人的なものだから」「宗教に任せたらどうか」「病院で考えてもらったら」というような回答が出たということ自体が私は非常にショックでした。

今まさにコロナで、政治が人の命を左右するということが身近に起きているわけなんです。それなのに、行政側の人たちがそういうふうを考えているということは、正直言って「え、なんでなん？」と大きな声を出したかったです。みんな生きていくのがすごくしんどい、それはどの立場の人でも、今いろいろな社会的制限を受けて生きていくのがすごく困難だし、生き方を変えていかないとダメという、そういう時に、社会の人、一人一人が、どうやったらみんなの命を守れるかということは考えていかなければならないことで、そのことを放棄した発想なんじゃないかなという気がしました。

冒頭でもちょっとお話がありました、今回の懇話会のチラシを送ってもらった時、たしかに「葬式か」という色だったんですよ。紫、グレー、薄い黄色みたいなもので、ふわふわと水玉にはしてあるんですけど、なんでこんな暗い配色にするんだろうと思って、別に死を明るく捉えて、明るくする必要はないかもしれないけど、わざわざ葬式に使う色ばかりを出してこなくてもいいんじゃないかなと思ったけど、きっと制作者はわざと葬式っぽくしてやろうとは思われてないと思うんですよ。自然にイメージの中に、イメージカラーのようなものがある、そうしておくが無難という考えが入っているはずなんです。

私、障害のこととか若者の死ぬこととかに取り組んでいる時、やっぱりそういうバイアスがかかっていることにすごく直面したの、障害者や福祉のことは、ピンクや薄いグリーンとかでふわふわとまとめておけば誰

もひっかからないし、誰からも反感は買わない、かわりに誰からも理解されない、すーっと流れていってしまうものというか、ひっかからないようにするためのイメージカラーだったりすると思うんですよ。そういうものを私たちはどこで学んだかという、教育の中で学んできてしまっているんですよ。

だから、私はやっぱり教育を、戦後70年以上経って、義務教育というものが生まれてから、少しずつは変わっていますが、ほとんどアップデートしないまま来てしまっている教育を、今の時代に即した形にアップデートすることが、おそらく生きるとか死ぬとかということ、人間はどうしていけばいいのかということに、価値観を覚えたり、考えたりすることにつながるのではないかなと考えています。

○上田 洋平さん

ありがとうございます。アンケートが興味深いので、取り上げて最初の話題にしていますが、決してその意見を否定するとか、打ち負かすという意図ではなくて、よくぞ出してくれたということで俎上にのせているんですが、ミウラさんがおっしゃった、考えることを行政が放棄しているんじゃないかという話、これはあとで三日月さんから、どうして行政が死生観を議論することに躊躇するのか、その事情について聞かせていただきたいなと思います。

続いて打本さんから、死生を問うことの意味について、お考えを聞かせていただきたいと思います。コロナで弔いの文化とか、あるいはその知恵の継承も危ぶまれていますよね。葬式もできなくなっている、そのへんも踏まえて聞かせていただきたいと思います。

○打本 弘祐さん

先ほどのミウラさんの話で「葬式か」という話がありました。「死生懇話会」という時に、なんで私が選ばれたのかなというのを疑問に思いましたが、やはり僧侶だからかというのが私の中にもありました。死に関わる職業としてまず真っ先に僧侶があがるというのは、社会がそういうふうにより上げてきた、非常に長い伝統の文化でもあります。

でも、それは今、崩壊の危機に直面しているんです。人口減少社会で、少子高齢化は寺院にも影響してきてまして、次にやってくるのは寺院消滅と言われていています。これは実際にある宗派の3分の1のお寺で継承者がいな

いというような調査もあります。

そうなるかどうかというと、お寺が持っていたお墓が荒れていく、誰も管理できなくなっていくという問題、そこに入る予定だった方々が「わたしのお骨はどこに行くの?」「誰が弔ってくれるの?」いう新しい問題を実は生んでいます。

私も行政がなんで「死生」のことに取り組むのかと疑問に思った時に、いくつか調べてみました。そうすると熊本県などでは、知事のマニフェストのもと県庁でアンケートをとっています。墓地を、今までは公衆衛生の観点から考えていたんですけど、そうではなくて生涯を通した安心を実現する、誰もが亡くなっていかなければならないんだから、やはり福祉の政策に転換していくという方向で研究会をもったりしていると、そういった取り組みが出てきています。

やはりコロナの問題で弔えない、弔いに立ち会えない、また見送ることができない辛さを抱える人たちというのも現実には出てきています。そういった問題が出てきているのは事実ですので、弔いの文化の継承性の問題はやはり出てくると思います。行政の関わりという面では、そういったところももしかしたら今後考えていくことが必要なのかなと、今回私自身が思うところです。

○上田 洋平さん

ありがとうございます。墓地の話、たしかにそうですね。それから何かで読んだんですけど、火葬場も足りなくなるんじゃないかと。そういう意味では、本当にバトンタッチ、空き家の問題にしろ、山林の問題にしろ、耕作放棄地の問題にしろ、亡くなっていく人の資産をどう受け継ぐかというのは、単に死や生をめぐる今までの行政上の部署や専門家の問題でもないことに、どんどんなってきたりしているなど。地域課題がそれらを融合させる方向で待たないようになってきているなど思います。

また打本さんには、次回以降も、では「宗教に任せておいてくれ」というのか、あるいは「宗教に任せておいてはいけないのか」といったことも聞いてみたいなどと思います。

では楠神さんお願いできますか

○楠神 渉さん

先ほど、青柳さんの話の中に学びというのが、なかなか学校の中で死について考えることがないんだというような話もありました、

またミウラさんの方は教育をアップデートすべきじゃないかというお話もありました。私も、今、介護職員の初任者研修って、介護人材が少なくなっている中で、介護の分野で携わる方たちの教育に携ることがあるんですが、そういう人たちに、例えば國森さんという方が看取りの写真集を作られているんですが、この前それをお見せしたら、私としては「温かいよね」とか「こういった死もあるんだよね」って気づいてほしいと思って置いていたんですが、その人たちは「事件があります」「家の布団で死んでいます」というようなことをおっしゃるんですね。

「え?事件?どうして事件なのかな」と思ったら、よく考えたら、最近、ご自宅で実際に自分が死に関わる場面が本当に少なくなっているんだなど。私が生まれた頃は、家で亡くなるのがそれほどめずらしいことではなかったんですが、今はほとんどが病院で亡くなるようになって、それが今これからまさしく介護の分野で、看取りとか、そういうことに入ろうとしている若者でさえ、写真を見て「事件だ」としてしまう。そういう現状があるんだとしたら、これは個人の問題だけではなくて、多死社会を迎えるにあたっては、やはり行政の方とも一緒に、教育の観点からも、そういったところでちゃんと死に向かい合っていくと。そうでないと、日本全体、これからの社会に耐えられないのかなと思います。

それから、死というものを決して遠ざけて見ないふりをするのでなくて、ちゃんと我が事としてとらえて、そういうふうにするためには、小さい頃から「死とは何か」ということを考える機会を作っていけたらいいのかなと思います。

県のアンケート結果では、こういったことを取り上げるのかについては拮抗していましたが、ぜひ取り上げてもらって、滋賀県全体で、小さな子どもから大人まで、みんなで考えるきっかけになれば良いのかなと思って皆さんのお話を聞いておりました。

○上田 洋平さん

ありがとうございます。(アンケート結果が)賛否拮抗というのが、それがあからこそ、この懇話会の意味があるのかなと。それから「事件」、先ほど休憩時間にもここでちょっとしゃべっていたんですけど、テレビをつけると、毎日毎時間毎分、誰か死んでいますよね。刑事ドラマとかで。そういわれてみた

らみんな事件ですよ。事件としての死、ドラマでも出てきて、そういうものに日夜触れているけど、リアルな死には触れる機会がないんじゃないかと、そういう話もしていただきました。

それでは越智さん、いかがでしょうか。

○越智 眞一さん

行政に関わるか否かについては、やはり、積極的に考える場を提供していただきたいと思うんですね。色々な場、教育の場が一番大きいと思うんですけど、いろいろな機会を通じて「死」というものを考える場を作って頂きたい。

一般的な風潮として、先ほどテレビの話がありましたけど、「死」というものを観たくない場合はチャンネルを替えればいいですね、だから現実逃避、現実ではないですけど逃避できる。

ある話では、飼っていた犬が死んだ時に、その死んだ犬を電気屋に持ってきて「電池をかえて」と言ったというようなことがあるように、生命というものが一体どのようなものを子どもが知らない。そういうことからいくと、幼児教育から手をつけていく必要があるのではないかと最近思っています。それから亡くなられた方の、死体を見る機会が非常に少ないですね。お家で亡くならないから、みんなに見守られながら亡くなるということがない。ほとんどの場合、納棺されてからお葬りの場面で見ると。だから最期の亡くなられた方の印象は、棺の中で花に包まれた姿を見るというのが最期のお別れで、死体を見る最期の印象。もっと見る機会をつくれるような、連れて行って「見なさい」というわけにはいきませんが、面会させられるような風潮をつくっていただければと思います。

死について考えることを行政の方が回避するというのは、寂しいといえば寂しいですね。死の裏返しに生があるわけですから。生きるということに対して、生きるということは楽しいことだと、楽しさというか幸福を演出するのは行政の仕事なんだから、その裏返しを放棄していることに他ならないと思うので、ぜひやって頂きたいなと思いました。

○上田 洋平さん

ありがとうございます。では青柳さんどうですか。委員の皆さんの意見も聞いてみて。

○青柳 光哉さん

僕は行政が場を設けて死について話し合うのは、とても意義のあることだなと今聞いてて考えました。やっぱり死ぬことに対する恐怖、怖いっていうのは、わからないから不安になるのかなと今すごく感じていて、行政の立場で、率先して死ぬことについて議論をして下さることは、皆さんが死に対する興味を出すというか、話し合うきっかけを作ることだととても意味があることなのかなと考えました。

それに対して、「個人のものである」という否定的な意見が多かったというのは、僕はそれは一つ事実として受け止めてもいいんじゃないかなと考えます。というのも、「個人のものである」と回答した人の背景にも、社会的な背景があったり、あとは個人で死別したときにもしかしたら悲しい思いをしたとか、何かしらの理由があって、「個人のものである」という否定の主張をされたんだと思ったので、そう主張したことは、そう思っていないと思わずに受け止めることで、またそういう否定の意見があるという前提で、ではなぜ「個人のものである」という否定の意見が多かったのかという議論をしていくことは、意見が対立しないというか、深めていくということで、良いことになるんじゃないかなと考えました。

○上田 洋平さん

ありがとうございます。もうファシリテーター、青柳くんにかわろうか（笑）

みなさんへの質問の際について「行政が死生についてかかわることの意義」という言い方をしてしまったのですが、この懇話会での議論は「行政に物申す」というものではなく行政だけでなく、行政も含めて公にあるいは社会全体で考えようというものですが、いっぽうでは、本当に悲しい経験をしていると、他人に気安く触れられたくないっていうことも当然ある。そこに行政が中途半端に突っ込んでいくと、当然逆に反発を招くだろうと思います。

色んな方面からお話をいただきました。三日月さんいかがですか。

○三日月 大造

ありがとうございます。まず今日は第1回ということですので、この間、県庁内で行ったアンケートを材料として使わせてもらいました。当然、県の職員、それぞれの部署で、県民の皆さんの命と暮らしに関わる、現在で

あればコロナ対応を含めて一生懸命やってくれていますし、ちょっと問い方なり、まとめ方なりで誤解を生むようなこともあったのかもしれないですけど、そういうことに加えて、このような勉強会、死生懇話会を持つこと、そして死生観について取り組もうとしていることについての賛否だとか、問いかけだったので、ちょっと、率直な面が、戸惑いも含めて出ているのがアンケート結果だったのかなと思っています。

ただ、今、上田さんがおっしゃったように、行政と私たちって何か線を引くよりも、私たちが一緒に生きている社会として死の問題、死生観をどのようにとらえるのかという言い換えをして、そこに例えば県庁で働く私たちはどんなことができるのだろうか、医師として働く私たち、介護支援専門員として働く私たちはどんなアプローチができるんだろうか、というような考え方ができれば良いなと思ったのが一つ。

それからこの回を経るごとに、例えば少し多くの方々に死生懇話会で考えてほしいこと、考えるべきであると思うことについてのアンケートをとってみて、今日的なテーマについて一緒に考えてみるのというのも重要なかなと思いました。

私は鉄道員として轢死、鉄道にはねられてお亡くなりになるご遺体であるとか、あとは阪神・淡路大震災や東日本大震災で突然肉親を失ったり行方不明になった方々、泣き叫ぶ方々とご一緒したり、15年ぐらい前に、エイズが蔓延するケニアで、まさにもう遺体の山があってですね、こうやって人間は疫病ですぐに死ぬから子どもをまたすぐにたくさん産んで社会を作らねばならないんだという、周りの人たちの物言いに絶句をする自分がいたりとかですね、そういうこと経験をしながら今いるんですけど、この日本において、滋賀県において、ぜひ今日たくさんいただいたような、まずはこのテーマで少し掘り下げてみて、考える機会を作っていけたらいいなと思いました。

それと同時に、何人かの方がおっしゃった教育の重要性、これは全て学校ということだけでないと思うんですけど、地域での教育だとか、社会での学び、学びというか、一方的な上から目線の教育というよりは、一緒にどう学んでいくのかという、こういうことも大事だなと思いました。

そういうことなどは県の役割というのも大変大事と思って聞かせていただいたので、今

後の施策になりには反映させていければいいなと思いました。

青柳ファンになりつつあります。なんかそれぞれの考え方を、「違うだろう」って攻撃したりするのではなくて、気軽に申し合せて、「そういう考え方もあるのか」という感じで進めていければいいなと、青柳さんの言葉を聞きながら思っていました。

○上田 洋平さん

まさに学んでいるという姿ですが、アンケートをしたのが県の職員さんということですが、逆の見方をすると、滋賀県庁の職員の皆さんの賛否拮抗というのは、県庁の皆さんが県民や社会の縮図的なものとして集まっていちゃるということがわかったかなと。どこかに偏っているのではなく。

例えば、県民に広くアンケートをしてみると、ひょっとすると同じような形になるのではないかという意味では、県庁も社会の姿をうまく反映しているんだなということがわかったかなと。

○三日月 大造

県の仕事、行政の仕事に、人の生老病死に関わらないことっていうのはないと思うんですけど、ただ行政として、どこまで自分の部署でどう関わったらいのかという結びつきが、みんながみんな等距離にあるかというところでもないの、その戸惑いが正直に出た結果だと思っています。

社会全体で、広く県民の皆さんにアンケートをとることも、やってみたいなとも思うんですけど、一方で問い方がものすごく難しいなど。設問一つで、あまり死を美化したり、何か特定の方向に持っていこうとせんがごときアンケートになると、これもまた違うだろうから、そのあたりもこの懇話会でどう聞いていければいいのか、つかんでいければいいのか、というようなことも一緒に考えていけたらいいなと思っています。

○上田 洋平さん

そうですね、そのへんも含めて、広く県民のみなさん、委員のみなさんからどんどん出していただいて、つくりあげていく懇話会になればいいかなと思います。ちょっとだけまだ時間あるんですけど、どなたかどうでしょうか。ミウラさんどうでしょうか。

○ミウラ ユウさん

常々、若い人から学びたいというか、今若い世代の人たちが、これからの日本を構成していく、20代の人、10代後半ぐらいの人たちが、どう感じて何が必要と思っているのかとか、そういうことを聞きたいなとずっと思っていたので、学生委員である青柳さんが来てくださったことは大変に重要なことだと思っていますし、本当にファシリテーターは青柳さんでいいと思います(笑)

おじさん、おばさんたちは、やっぱりキャリアがあるので、ある程度見通しが立ったり、考えを持ったりしているとは思いますが、ただ今を生きている人たちがこれからどうしたいかを聞かないでいて、自分たちがやってきたことばかりを押し付けていても何も変わらないと思うので、この死生懇話会一つとっても、せっかく新しい取り組みでスタートしたので、そういうことを取り入れてやっていけたらいいなと思いました。なんかまとめ的なことでなくてすみません。

○上田 洋平さん

ありがとうございます。僕は次回からいなかもしれませんが(笑)

そうなんです、最初にこの相談を受けました時に、座長とか置くのやめましょうって言いました。

私、ファシリテーターするなら学生の役をしたいと。率直な疑問とかを述べて、それを教えてもらうとかね、教え合う、補い合うという、共生できる懇話会にしようという話をして、ここに新しいスターが出ちゃいましたので、でもこれあんまり言うとプレッシャーになるといけないので、青柳さんだけじゃなくて、ぜひいろんな学生さん、もっともっと次回以降とかも参加できる形にもしていきたいなど。

その人たちが話す時に、周りの6人の委員の皆さんがそれを受けてアドバイスやお話をするというような形も面白いですよ。なんなら小学生や幼稚園の人たちとしゃべってみてもいいんじゃないかなとも思いますし。

ちょっと時間がきましたので、まだまだまだまだ話したいところあると思いますが、深めるところは次回以降にしたいと思います。

私の方からもちょうとだけ、まとめといいますか、あらためて振り返りということで、画面共有をお願いします。

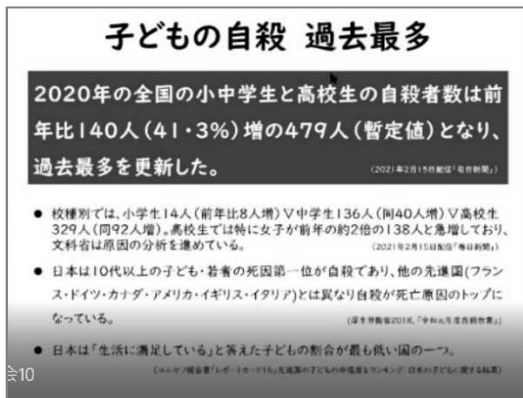


そもそも、空海、弘法大師が「生まれ生まれ生まれ生まれ生に始めて暗く、死に死に死に死んで死の終わりに冥し」と、数百年前に、あの弘法大使でもこう言って、「まだわからない」と、こういうことですから数時間でまとまるわけがないと、これ言い訳でございます(笑)。

まとめるというのでなく、何か施策にすぐに結びつくとかそういうのではなく、じっくり傾聴しようというこの姿勢が大事だと思います。しかも若い人も入って。

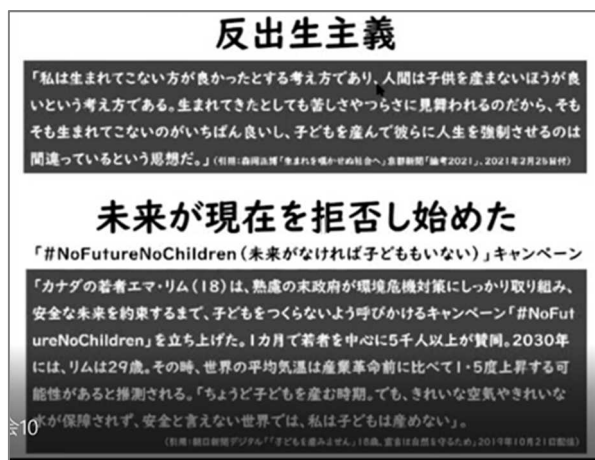
一方で、死は誰のものかという時に最近のニュースです。子どもの自殺が過去最多で、2020年の全国の小中学生と高校生の自殺者数が前年比140人、41.3%増で過去最多と、しかもこれは先進国では日本が突出して高い。やはりこれは個人の問題としてだけ置いておくわけにいかない。社会の責任があるだろうと、行政も含めて我々大人も含め、教育も含めて社会に責任があるだろうと思います。このへんは今後、ミウラさんや委員の皆さんとも突っ込んで議論していきたい。

自己肯定感、生活に満足していると答えた子どもの割合が最も低いです。QOLをどう高めていくか、藤井さんにもお話をききたいなど。



あるいは反出生主義というものも最近哲学で言われているようですが、生まれてこないほうがよかったとする考え方がじわじわ広がっ

ていると。子どもを産まなければよかった、あるいは、これは環境問題とも関わっているますが、「NoFuture NoChildren」、汚染された地球に子どもを生むのは子どもに対して申し訳ないと。私はこの考えには賛同しかねるところがありますが、しかし、若い人がこのようなことを言っている。「未来が現在を拒否し始めている」、未来が「来たくない」と。環境問題の中からも出てきている、これもやっぱり社会の問題、死生の問題に関わると思われます。この点については、あるいはゲストの方を招いてお話する必要もあるかもしれません。



今日、短時間でしたが、その中で今後につながる様々な深めるべきキーワードが出てきたと思います。またこの後、聴講の皆さんからのアンケートのご意見も含めて、事務局の方とも議題を揉んで深めていくことになるのかなと思います。

できれば、せっかくの機会ですから、私も次回もファシリテーターか何らかの形で勉強させていただきたいと思います。それでは知事、最後に一言感想をいただきたいと思えます。

○三日月 大造

ありがとうございました。今日は委員の皆様も、聴講いただいた皆様も、ご参加いただいたことに感謝申し上げます。

始めてよかったなど、始めさせていただいて、つくらせていただいてよかったなど、今思っています。ぜひみんなと一緒に考えて、この場でいろんなことを一緒に考えていけたらいいなと思っています。今日のこの短い時間だけで、たくさんのキーワードをいただきました。

・「いきること」、生と活の間に点を入れてみたらどうかという越智さんのお話がありまし

た。

- ・ 命のバトンという楠神さんのお話、
- ・ 打本さんの絵本を読みながら死について一緒に考えたかどうかとか、死者と共に生きるというお話、
- ・ ミウラさんの、共生も命を大切にすることも多様性・違いを認めるのも当たり前のことなんだけど、あえてそれを、僕らもよく使うんですけど、言ってしまう社会のありようをどう考えたらいいんだろうとか、
- ・ 藤井さんがおっしゃった「死に方も生き方」なんだと、死を含めてどう生きるかを考えてみたらどうというこの投げかけ方もすごく響きましたし、
- ・ 青柳さんのおっしゃった、看護師の実習を通じたご経験からのキーワードもすごくドーンとききました。

いずれにしても、今日いただいたたくさん言葉を、自分なりに咀嚼、受けとめてみて、砕いてみて、消化してきて、そして次出てくる考えとか言葉を紡いでみたいなと思っています。

もちろん若い人たち、できれば小学生とか幼稚園の皆さんとも、こういうテーマで話せたらいいなと思うし、僕なんかは、どちらかというベビーブーム世代の子どもの世代の一人として、たくさんいらっしゃるシニアの皆さん方との対話も、このテーマであるがために大事にしてみたいとも思っています。押し付けとかではなく、その世代の人たちが、どういう時代を生きて、どう考えていらっしゃるのかということを感じとって見て、一緒にまた語っていただけるといいなと。

次回が6月の予定です。また皆様と一緒にお互いにいろんな情報を集めて、次の機会に臨めたらなと思っていますのでよろしく願います。今日は本当にありがとうございました。これからもよろしくお願いします。

○上田 洋平さん

はい。ありがとうございました。ご聴講の皆さんもありがとうございました。また次回も楽しみにしています。

○事務局

これを持ちまして、第1回死生懇話会を終了させていただきます。本日は誠にありがとうございました。

おわり



〈死生懇話会 ～「死」を捉えた「生」のあり方を考えるヒントに～（県ホームページ）〉

滋賀県では、死生懇話会のご紹介とあわせて、「死」「生」に関する様々な取組、考え方について色々な方にインタビューさせていただいた取材記事等を県ホームページでご紹介しています。



URL：
<https://www.pref.shiga.lg.jp/kensei/kenseiunei/kousou/316588.html>

滋賀県総合企画部企画調整課 企画第二係